日本の国際化は何時から！

特定非営利活動法人 ミランクラブジャパン
理事長　マナンダール マダーブ・ナラエン

日本の国際化が始まったのは何時からでしょうか？「国際化」という言葉を政策レベルで使い始めたのは1980年代後半だ。1986 年に臨時教育審議会が“国際化”を提言し、1987年にJET（Japan Exchange and Teaching=外国語指導助手）の受け入れプログラムを開始,そして、1990年には入管法改正を行い留学生・就労外国人も受け入れ始めた。統計によると何と2025年末時点ではネパール人の入国は国籍別で 5位だ。中国は一位で93.0万人、2位ベトナム（68.1万人）、三位韓国（40.7万人）、四位フィリピン（35.7 万人）で五位はネパール30.1万人である。ネパール人が住む多い町では東京は63,710人、大阪府は27,813人、千葉県は26,348人、愛知県は23,328人、福岡県は22,037人である。

えっ！その昔の時代にも日本へ外国人の神が来日していた！それ本当？

そうなんですよ、日本には八百万（やおよろず）の神々がいるといわれます。天照大神、稲荷神、雷神、風神など、日本生まれの神々が大活躍しています。しかし神さまの世界をよく調べてみると、「あれ？この方、ずいぶん遠くから来ましたね？」という国際派の神々がいるのです。

代表的なのは、ヒンドゥー教の神々である。ただし、神々が直接日本へ飛行機で来たわけではありません。もちろん「東京行きの神様航空、ただいま搭乗開始です！」という便もありません。多くは仏教の世界に取り入れられ、中国や朝鮮半島経由で、日本へやって来たのです。まさに古代版・神さまの世界旅行です！

たとえば、創造神ブラフマーは日本に来ると「梵天（ぼんてん）」になりました。天界の王インドラは「帝釈天（たいしゃくてん）」。名前は立派ですが、雷や戦いも担当する、なかなか忙しい神さまです。

美しい音楽と学問の女神サラスヴァティーは、日本では「弁才天」や「弁財天」に変身しました。芸術、音楽、知恵に加えて、なんと金運まで担当！「音楽の女神だったはずなのに、いつの間に財テクの神になったの？」と本人も驚いているかもしれません。

象の頭を持つガネーシャは、日本では「歓喜天」または「聖天」として知られています。商売繁盛や夫婦円満など、人間界の重要な問題を担当することになりました。象の顔で神々しく、仕事はとても現実的です。

さらに、ラクシュミーは「吉祥天」、火の神アグニは「火天」、風の神ヴァーユは「風天」、水の神ヴァルナは「水天」として日本の仏教世界に登場しました。死者を裁くヤマは「閻魔王」となり、今日も「あの世の裁判所」の最高責任者として大忙しです。生前に悪いことをすると、舌を抜かれるという恐ろしいイメージもありま

すから、神さまの中では最も会いたくない面接官かもしれません。

財宝の神クベーラに関連する神格は、日本では「毘沙門天」として知られています。そして七福神を見ると、弁財天、毘沙門天、大黒天など、ネパールやインド・ヒンドゥー教文化と深い関係を持つ神々が並んでいます。日本の神さまチーム、実はかなりの国際連合なのです。

こうして遠い昔、ヒンドゥー教の神々やその神格は、仏教という文化の大きな流れに乗って長い旅をし、日本で新しい名前と役割を手に入れました。まるで「ネパールではサラスヴァティー、日本では弁財天です。副業は金運アップです！」という華麗な転職です。

日本の神社やお寺を訪れたとき、「この神さま、もしかしてヒンドゥー教の世界で活躍していたのかな？」と思ってみてください。神々の世界は国境を越え、文化を越え、名前まで変えてきました。神さまたちの壮大な国際交流――それを知ると、日本の神仏巡りが少し面白く、そしてありがたく感じられるかもしれません。

